

〈2008年5月28日（水）チャペル講話〉

Noble Stubbornness

（ノーブル・スタボネス）

安 藤 文 四 郎

おはようございます。

ただ今紹介していただきました、安藤と申します。このチャペルの時間に、皆さんにお話しする機会を与えていただけたことを大変光栄に思っております。

今、打樋先生よりお話がありましたように、春学期のチャペルでは「出会い」という共通テーマのもとで、いろいろな教員の方がここに交代であらわれて皆さんにお話をすることになります。本日はその第1回目でございます、私がどういうわけかトップバッターということでございます。

出会いという言葉は非常に含蓄のある言葉だと思います。私たちの日々の暮らしは1日として同じ日はないわけですから、毎日毎日が新しい出会いの連続であるとも言えます。ですから、出会いというのは人生そのものであると言ってもいいわけですが、ここではそんなに話を広げません。人との出会い、それからさまざまな出来事、事件との出会い、また音楽や小説との出会い、さらには風景との出会い、というのもあるでしょう。さまざまな出会いを皆さん既に経験してきたことと思いますが、これからもまたさらに新たな出会い、いろんな種類の出会いを体験すると思います。そういった出会いをぜひ大切にしていきたいと思えます。

本日、私は「心に残る言葉、心に残る人物」と題しまして、15分ぐらいの短い時間で、うまく話がまとまるかどうか大変不安でもございますが、なるべくうまくまとまるように努力してお話をしてみたいと思えます。

ところで皆さんは、それぞれ心の中に大切にしている言葉、あるいは尊敬の念を持って心の中で大切にしている人物、人物像というのがありますでしょうか。私の話は、まず、「心に残る言葉」から始めたいと思えます。それを次に「心に残る人物」へとつなげていきたいと思えます。

皆さんは既に関西学院大学のスクールモットーとして「Mastery for Service」という言葉を学び、いろいろお話を聞いてこられたかと思えます。関西学院にはそれ以外にも、スクールモットーに準ずるものとして大切にしている言葉がございます。その一つは社会学部の玄関の礎石のところに刻まれております、「真理は汝らに自由を得さすべし」という聖書からとられた言葉があります。

しかし、それ以外にも関西学院が大事にしている言葉がありまして、私が今日皆さんに紹介したいのは、その中の一つでありますけれども、「Noble Stubbornness」という言葉でございます。「Noble Stubbornness」の Noble は高貴な、という意味であります、Stubbornness というのは余り聞かない言葉かもしれませんが。辞書を引いてみますと、まず第一に「頑固」という翻訳が出てまいります。皆さんこの「Noble Stubbornness」という言葉、初めて聞くかもしれませんが、実は入学式で体育館の前を通ったと思うんですけど、その体育館の近くに石碑が建てられてまして、そこにこの言葉、「Noble Stubbornness」という言葉が刻まれております。生協などに行くついでに、ぜひ一度ごらんになっていただきたいと思えます。

この言葉は1910年代の後半といえますから、もう90年も前になるんですね。当時の硬式テニス部の部長であった畑先生という方が、硬式テニス部の部員たちに激励の意味を込めて与えた言葉であるというふうに伝えられております。もともとは、あるイギリスの詩人の詩の一節であるそうです。現在でも体育会

ではこの言葉を大事にいたしておきまして、体育会のモットーとして「Noble Stubbornness」という言葉を掲げています。体育会のホームページなどを見ますと、「高貴な粘り強さ」という訳語を当てているようです。一般には「品位ある不屈の精神」と訳されて、関西学院では大事にしているんですが、体育会の方では今言ったように「粘り強さ」というふうに理解して、体育会の後輩たちに伝えているようです。

私は別に体育会のこのような伝統にけちをつけるわけではございませんが、この言葉を体育会の人々の専有物にするのは非常にもったいないと思います。この言葉をもう少し深く考える必要がある、またその価値がある言葉だと思っています。この言葉は私も関西学院に来て初めて知った、初めて出会った言葉でありまして、初めてこの言葉を聞いたのは、当時の宗教主事であった船本先生という方から多分聞いたと記憶しています。Noble という形容詞が Stubbornness についているわけですから、ちょっと変わった言葉だなと、しかし何かちょっと心にひっかかるものがあるって忘れないで記憶に残っている、そういう言葉でございました。しかし、関西学院で長い生活を送るうちに、実はこの言葉、「Noble Stubbornness」という言葉は私が尊敬する人々、尊敬する人物を形容する言葉として非常にぴったりの言葉であると思うようになりました。あるいは、そうであることを発見いたしました。

この言葉の語源といいますか、言葉の元に帰ってみたいんですが、stubbornness は2つの言葉からできておりまして、stub、それから born です。Stub というのは木の切り株、木の根っここのことです。そして born というのは例えば “They were born.” 生まれるということですね。ですから、stubbornness というのは、木の切り株のような性質をまるで生まれつきのように備えている、そういう意味になるわけです。木の切り株というのは、皆さん木を切った後、切り株を掘り起こした経験があればおわかりだと思いますが、木の切り株を取り除くのは大変な労力を必要といたします。木が大きければ大きいほど、また木が地中深く根を張っていればいるほど大変な難作業であります。そこで「手ごわい」とか、それから「厄介な」とか、そういう意味が生じまして、それから「頑固」という意味もまた派生してきたと思われるわけです。今日では専ら頑固という意味が第1番目の意味になっておりますが、言葉の起源に立ち返りますと、大地に深く根を張っていて、ちょっとやそつとでは動じない切り株のような精神のあり方、そのことを指していると思います。

この「大地に深く根を張っている」と言うときに、さらに「大地」の意味を考えますと、それは人々がその上で暮らしている、また人々の暮らしを支えている大地ということになります。その大地に深く根を張って、嵐が来ようが、大水が押し寄せようが、決して動かないでその大地を守っているという、そういう姿を意味しているのではないかと思います。そこに Noble という形容詞をつける意味があるのであろうと思うわけです。

「大地」ということを少し言いかえますと、それは人々の生活ですとか、世の中のあり方ですとか、そういうものを根底において支えているような普遍的な価値（社会学では価値という言葉をよく使います。皆さん1年生ですと聞きなれないかもしれませんが）、あるいは大きな正義という意味で大義と呼んでもいいかもしれません。普遍的な価値とか大きな正義、そういったものに根差して、それを守り抜こうとする、ちょっとやそつとで動じない、そういう姿勢を、この「Noble Stubbornness」という言葉が意味しているのではないかとこのように思うようになりました。そうしますと、それはまさしく私が尊敬している人物、尊敬に値すると思ひ描く人物にぴったりの形容詞になります。

もう一つぴったりの形容詞といいますのは、打樋先生に読んでいただきましたマタイの福音書の中にあります「地の塩、世の光」という言葉、これもまた私にとって尊敬する人々を形容するのにぴったりな言葉でございます。そこで信仰の文脈を離れて、打樋先生にもお許しをいただいて、この言葉を使わせていただくんですが、「地の塩」というのは塩ですから、塩は物を腐らせない、塩辛いことと塩の役目を果たせないと聖書の言葉にありますけれども、塩辛いことによって物の腐敗を防いでくれるものであります。私にとっては地の塩たる人物というのは、人々の良心の腐敗を防いでくれるような、そういう人、それは

「地の塩」と呼ぶにふさわしい人たちではなかろうかと。また「世の光」といいますのは、人々が思い悩み、右するべきか左するべきか判断しかねるような困難な状況にあるときに、その心の中に一筋の光を差し入れて、気づかないことに気づかせ進むべき道筋を考えさせてくれる、最後に決めるのはそれぞれの人でしょうけれども、足元を照らして、どちらに進むべきかという判断を促してくれる、そういう働きしてくれる人が、「世の光」と呼ぶにふさわしい人ではなかろうかと思うわけです。

以上が、私が心に残る言葉として皆さんに紹介したい「Noble Stubbornness」でございますが、この形容詞にぴったりな、私が心の中に大事にしている人物を1人だけ、時間が本当に残り少なくなっておりますが、1人だけ紹介しておきたいと思っております。

それは斎藤隆夫という人物であります。兵庫豊岡の近くに出石^{いずし}という所がありますが、現在は豊岡市に編入されておりますその出石の出身の方であります。明治3年の生まれですから1870年生まれです。それで1949年、戦後すぐに亡くなった、79歳で亡くなった方であります。明治3年の豊岡ですからね、想像していただければおわかりいただけると思いますが、農村地帯ですね。彼が伝記として書いた『回顧七十年』という書物がございますが、幼いころのことは簡単にしか書いてないので、想像で補うしかありません。彼は少年の頃より志を抱きまして、^{でっち}丁稚奉公などもしながらなんとか勉強を続けようとしておりましたが、豊岡にいたのでは自分の志は達成できないと思ひまして、東京に出よう、19歳のときであります。皆さんぐらゐの年齢ですね、お金がないので東京まで歩いて、はるばる東京まで上京いたしました。そこでいろんなことがあるんですけど、たまたま後に徳島県知事になる桜井という人に偶然出会うこととなります。これは斎藤さんにとって大きな出会い、かれの人生において大きな転機となる出会いとなりました。その方に出会いまして、その方の書生として、その人のうちで生活の面倒を見てもらい、またそこで雑用などをこなしながら勉学をいたしまして、2年後に早稲田専門学校、現在の早稲田大学に入学いたしました。そこで法律学の勉強をいたしまして、弁護士の資格を取り、さらに弁護士の仕事にも飽き足らない、政治の方面での活躍を目指しまして、アメリカのイェール大学に留学する。しかし、留学中に肺結核が悪化いたしました、短期間の留学で帰国することになりました。

1912年、大正元年ですが、衆議院議員に初当選して、以後ずっと議会の中で言論によって活躍しました。この人を有名にしたのは1936年、昭和11年5月の「肅軍に関する質問演説」、これは二・二六事件、クーデター未遂事件であります。その直後の質問。それからまた、その4年後の「支那事変処理に関する質問演説」というのが特に有名です。皆さんは余り御存じないかもしれませんが。私はもっと評価されるべき人だと思っております。日本の戦前の議会を代表する政治家として、もっと高く評価されていいと思うわけです。

これらについて少し詳しくお話ししたいんですが、時間がございません、簡単にしか申せません。二・二六クーデター未遂事件の後の国会での演説、もうこの頃には軍部の言論に対する圧迫、また自由主義思想に対する圧迫など既に始まっております、議会で演説するのもかなり慎重を要する、場合によっては右翼などに命をつけねられるという状況がありますので命がけでもある。そういう中で彼は、そもそも我が国においては明治以来、軍人は政治に関与してはならないとされているはずだと述べます。それは明治天皇が軍人に与えた勅諭にも書いてある、明治憲法と国の法律も禁じている、また伊藤博文の憲法解釈の書物がございますが、伊藤博文も軍人は政治に関与してはならないと言っている。そのことを、陸軍大臣どう思うか、という質問をするわけです。また二・二六事件以前に、三月事件とか十月事件、あるいは皆さん日本史を勉強した方は御存じの、五・一五事件という軍人による政治テロ、これらは組織的な行動というより個人的な行動とされておりますけれども、軍人による政治家の暗殺、政治テロというのがあったんですね、二・二六事件以前に。それに対して今まで軍部は何をしてきたか、綱紀肅正を図るところか事件を闇に葬ってきたのではないかと、質問という形をとって軍部の批判を行いました。

また4年後の「支那事変処理に関する質問演説」では、当時の近衛首相が国民政府を相手にしないというような近衛声明を出した。近衛首相はそんなことをして、今なお日中戦争は続いているのに解決できる

のか。また軍部はしきりに東亜新秩序ということを使うけれども、それは中身の無い貧相なお題目ではないか、というようなことを言うわけです。

昭和11年の「肅軍演説」のときには、翌日の新聞は大々的にこれを取り上げまして、やんやの称賛をした。そこで斎藤隆夫も一躍有名になるわけです。2度目の支那事変処理に関する質問をしたときには、もう彼の属していました民政党の幹部たちは軍部にびくびくしておまして、演説が終わるや否や斎藤隆夫を呼びつけて議事録を削除する、演説の3分の2を速記録から削除する。その上、民政党から除名することになった。やがて懲罰動議にかけられまして、ついには衆議院からも除名されるということになった。このときに除名に反対したのは、305名の議員のうちたった7名だけでした。

斎藤隆夫がこのようにして命がけで守ろうとしたものは、彼の父親の世代がつくった明治の国家、それは立憲君主制でありますから、いろいろと制約、制限、欠陥のあるものでしたが、民主主義の歴史という観点からすれば大きな一歩を踏み出した、その立憲君主のもとでの議会制民主主義、そういうものを彼はぜひとも守りたかったんですね。ところが、目の前でその明治国家が扼殺^{やくさつ}、つまり首を締められるようにして死んでいく、そのありさまを目撃して、いてもたってもいられないということで、だれもが軍部を恐れ、唇寒しということでものを言わなくなっている中で、果敢にこのような軍部、あるいは政府に対する批判を行った。そのことだけを私は評価しているのではなくて、彼は一貫した自由主義、あるいは民主主義の立場で明治の体制を守るべきだと、そういう立場で一貫した言論を行った人であります。そのことを私は最も評価したいわけです。

彼は議会から除名されますけれども、実はその2年後の総選挙におきまして、故郷出石の人たちの熱心な支持を得まして、最高点で復活当選を果たしました。彼は終始一貫、目の前で明治国家が減んでいくことに抗議を続けまして、近衛首相にも質問文を出しました。近衛新体制というのはナチスやイタリアのファシストの全体主義のまねではないのか、まねであってはならない、というような質問状を送っているわけでございます。

日本の戦前の明治国家というのは、何も米軍の圧倒的な武力の前についで去ったのではなく、また広島や長崎の原爆投下で敗北したのもなくて、その前に議会みずからが滅びていった、議会人みずから、政党人みずからが滅びの道を歩んでいったという、そういう歴史があるんですね。その中で言論人として闘った斎藤隆夫という人がいたことを、ぜひ知っていただきたい。

時間が来てしまいました。予定の時間を超過してしまい御迷惑かけますが、これで私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。